
俺の姉貴がこんなにドサドなわけがない

ヤマダマヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の姉貴がこんなにドサドなわけがない

【Nコード】

N7506X

【作者名】

ヤマダマヤ

【あらすじ】

ここは俺の部屋。いつも通りな風景。ベッドだったり机だったり本棚だったり姉貴だったり。特に何の変わり映えもないって何で何事もなかったかのように姉貴が鎮座してるんだよ・・・

「ねえ」

「ん？」

「馬鹿って呼んでみて」

「はあ？」

突然何を言い出すのだろうかこの姉貴は…

「嫌だ」

「どうして？」

「どうしてって…」

姉貴がそんなことを言い出すのはたいてい嫌なことの前触れなんだよな…

「もしかして、私がいかにスーパー優秀美少女だから、愚弟ごときがそんな

ことを言うなんてとても恐れ多いからとか？あー、そんなことを思ってくれるなん

て私はそんな愚弟を持って嬉しいわ」

「ぐっ…！」

何でこの姉貴はこんなことを自分でスラスラ言えるのだろうか？

まあ確かに姉貴はスーパー優秀美少女なのかもしれないが…

「いや、ちよつと違うみたいね。確かに私がスーパー優秀美少女だということとは

認めるけど、本音は私がこんなことを言い出すなんて嫌な予感しかないってと

ころかしら？そんなことを思ってるなんて残念だわ愚弟」

「………！」

見透かされている…！

「まあいいわ、そんなことより愚弟」

「いい加減その愚弟って呼び方やめろ」

「あら、愚弟っていうのは愚かな弟、まさにあなたのための言葉じゃない。ねえ

、戸棚の下から2段目の左側の棚にしか隠す能のない愚弟？」

「すいません愚弟でいいですお姉様！」

くっ…昨日工口本の隠し場所がバレて配置変えたのに何でもうバレてるんだ…！？

「分かればいいのよ。とにかく、私のことを馬鹿って呼んでみなさい」

「…」

「ねえ」

「…」

「早く」

「……………」

マズい、姉貴の顔が俺にどんどん接近してこのままだと…

「ねえ確か…」

「…？」

「名探偵コナンに人工呼吸に見せかけて殺そうとした人いたわよね？」

「何故今それを言う…？」

しかも劇場版！

「何故って…そりゃあ…ねえ？」

「何でこいつこんなことも理解できないのみたいな顔で同意を求めな！」

「うるさいわね、実験するわよ」

「じ…実験…？」

この体勢で実験ってこのネタの流れは…

「そう…実験…お互いにキスするフリをして口を塞いでどっちが先に息絶えるか

という実験」

「やっぱり殺す気か…？」

「うるさいわねえ、とつとと言いなさいよ、いい加減殺すわよ」
「ストレートになった!」

ああもう本当に面倒だ。

さっさと姉貴の言うとおりにしてこの件を終了させよう。

……いや待てよ、これはチャンスじゃないのか?

姉貴が俺にバカと呼ぶ、つまり罵倒することが許可されている今、
日頃から罵倒

されまくっているお返しをするチャンスではないか?

ここで仕返しせずにはいられるだろうか、いやいられない。

よし…頭を冷やして…チャンスは一度…最小限の力で最大限の罵倒
を…

「バカ!アホ!クズ!オタンコナス!カス!(作者ネタ切れのため
後は思い思いの罵倒

の言葉を思い浮かべてください)」

何かもう色々とかオスだった。

つーかよく考えたらここでヘタな事言ったら後で殺される可能性がある
あるじゃん。

叫びすぎて荒れてしまった息を整えながら姉貴の動向をつかがう。

姉貴はさっきから目を閉じたまま何かを考え込んでるようだ……怖い。
い。

「あの…お姉様…?」

「それだけかしら?」

「え?」

「それでもう十分かしら?」

「あ、は、はい…」

「そう…」

こほん、と息を整えた姉貴はその言葉を発した。

「バカって言うほうがバカなのよ、愚弟」

「」

「どうしたの愚弟、部屋の隅で体育座りして。みっともないわよ。元々存在がみ

つともないけど」

「……いや、世の中何だかなあ、と思って……」

まさか1400文字に及ぶやりとりの結果がこれだと思つと……

はあ……

とりあえず、この件を早く終了させよう。

「そついえば姉貴、今日はMさんとデートじゃないのか？」

「ええ、そつよ」

「時間大丈夫なのか？もう12時をまわるぞ」

「ええ、問題ないわ。彼には午前5時から待ってもらってるし」

「お前は彼氏に何て事をしてるんだ!？」

「………？何か問題かしら？」

「……問題しかねえよ……」

人を7時間も余裕で待たせる姉貴つて……

いやさすがにMさんも冗談だと思つてまだいないか……

「今そのMからメールが来たわ。『待ち合わせ場所であなを待ち始めてから7時

間経ちました。今日もあなたのその美しい御姿がみれるかと思つともうずつと立

たずにはいれません。早くあなたに会いたいです』……て」

「………」

もはやツッコむ気力も起こらなかつた……

「まあ確かに、そろそろ行つてあげようかしらね。出かける準備をしなきゃ」

そつ言いながらおもむろに腕を広げる姉貴……そーなのかー？

「何してんだよ？」

「そつちこそ何してるのよ。早く脱がして着替えさせなさいよ」

「するか!?!」

どこぞの魔法学院のお嬢様（初期型）だお前は！？

「いけない奴隷ね、使い魔は主人の目となり耳とならなければいけないのよ」

「お前と契約した覚えがねえよ…」

「しかし、7時間も待たされてそれでも大丈夫だなんて、Mさんも何というか…」

「理想のマゾヒストよね」

「ほかそうとしたのに言うなや！！」

「だけど、彼のマゾヒストぶりは本当にスゴいのよ？

前に私がうっかりヒールでアゴを打ち抜いちゃった時も、うっかり熱いお茶が入

った湯飲みを彼に向かって投げちゃった時も、うっかりレポートの束で頭を振り

抜いちゃった時も彼は笑顔でイエス！ユアハイネス！って言ったわ。

あれは真性のマゾね」

「……うん…まあ…この際あの人マゾかどうかは置いて…お前それ本当にうっかりなのか？」

どう見ても悪意しかこめられていないうっかりだ…

「しかしまあ…なんだかねだで仲良く(?)やってるじゃん。良いコンビなんじゃないの？」

「何言ってるの？ぜんぜんダメよ」

「えっ？」

「確かに彼もマゾヒストという意味では特にいじりがいのある稀有な存在だわ。

でもそれだけじゃ私には物足りないの。やはりツツコミという存在がいた方がや

りがあるわ。あなたのように！」

「！」

なん…だと…？

「そうね…あなたは差し詰め私の愛人と言ったところかしら…？せ
いぜいM君に腸

の中に誰かいないか確認されないことね…？」

「……………」

「そろそろ行ってくるわ愚弟、もとい愛人…」

そう言つて、姉貴は出て行った。

…あー疲れた……………

俺の部屋なのにアレがいるだけでもの凄く疲れる…

しかし俺Mさんに一回くらいしか会ったことないけど…

良い人そうだったのになあ…

……………愛人…か…

いや、もちろん俺はシスコンではないぞ。

…ただ、俺たちは姉と弟という言うなれば腐れ縁なんだ。

だから、こんな姉貴だけどなるべく大事にしていこうと思う

……………

……………

…

わけねーだろ…

今のは良さげなオチがまとまらなかったから言っただけで…

しかしホントに姉弟つてのは腐れ縁だからな…

これからも姉貴のサドに付き合つていくのかと思うと…

……………はあ…

(以下弟の延々とした愚痴なので強制的に完)

(後書き)

どうも、マヤちゃんです。

間が開いても無事投稿できました。

今回はコメディイということでもいつも以上にネタを詰め込んでみました。

普段もキャラとかは結構いろいろな先人たちのキャラたちを参考にしていたりするのですが、今回はいつも以上に詰め込んでみたら何だかカオスなこと・・・

さて次回は・・・ほのぼのってよりはグダグダだと思います。

というかこれは投稿していいのだろうかという危険なネタが・・・？
まあお楽しみにしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7506x/>

俺の姉貴がこんなにドサドなわけがない

2011年10月20日01時08分発行